

〔書評〕

森田 武著

『室町時代語論攷』

本著は、著者の昭和二八年から昭和五九年までの三十余年間に亘って執筆された、室町時代語関係論文十九編を収める論文集である。著者は先ごろ、一大訳著『邦訳日葡辞書』(岩波書店 昭五五年刊)につづき、『時代別国語大辞典 室町時代編I』(三省堂 昭六〇年刊)を世に送られた編者の中の重要メンバーである。バレット写本に基づき、『天草版平家物語難語句解の研究』(清文堂 昭五一年刊)に次ぐ本著の刊行により、著者の学問のパスpekテイヴが示されたように思う。即ち、キリシタン資料のみならず、朝鮮・中国資料に亘る外国資料全体を覆う広汎な学識、また版本から写本にまで届く緻密な眼、それに加えて著者は熊本県ご出身で、そのネイティブな方言も著者の研究にとって強力な傍証となつて(例「まらする」など)、日葡辞書をはじめ、室町時代語解説に駆使されている。さて、最初に本書の全容を展望するために目次をかかげる。全体は三部に分れている。

第一部 資料編(所載論文十二編)

- 1 キリシタン文字
- 2 キリシタンと日本文学
- 3 国字本伊曾保物語

小 島 幸 枝

- 4 捷解新語攷
 - 5 捷解新語の国尽し
 - 6 キリシタンの日本語学習——マノエル・バレットの注解を中心に——
 - ⑦ 日本語の特質とその学習法並びに教授法——ロドリゲス日本小文典より——
 - 8 落葉集本篇の組織
 - 9 日葡辞書の成り立ち
 - 10 日葡辞書の解説と利用
 - 11 日葡辞書解説上の諸問題
 - 12 外国資料の誤謬
- 第二部 音韻編(所載論文四編)
- 1 音韻の変遷(室町—江戸時代)
 - 2 キリシタン資料におけるハ行音のローマ字表記
 - 3 日本語の語音連結の一傾向
 - 4 「大きに」と「大いに」——キリシタン資料を中心として——
- 第三部 語彙編(所載論文三編)
- 1 「さもしい」考
 - 2 敬語「もなる」考

3 「はんべん」考

以上を大別すると、

解説・講座もの 五編

論文 十三編

翻訳 一編

より成り、この内、○印を付した第一部の第七論文、ロ師小文典第一・二節の翻訳が、本著上梓にあたっての書き下ろしである。

土井忠生博士の序文によれば、本著は「日葡辞書」周辺の付随的諸論を採録し」たもので、この外に日葡辞書研究の精髓を示す主要論文を一書とする予定とのことである。このためでもあろうか、本著には語彙を自己目的とした論文は語誌三編だけであり、また、資料編の中には語詞の用例に重複が少なからず見られる。一例をあげれば、「ドゼン」は巻末の語句索引には一ヶ所しかあげられていないが、四論文にあらわれる。総語数三万二千余語を擁する日葡辞書の研究者として第一人者であられる著者には、もう少し幅広く用例を示していただきたかつた気もするが、著者もあとがきに断つておられるように、用例の重複は論文集という性格上、やむをえないことかもしれない。

しかしながら、いま「ドゼン」に限っていえば、その執筆年代が昭三七、五〇、五二、五三年となっていて、十余年後も再び同一例を取り上げられたことがわかる。してみると、このことは単なる用例の重複でなく、日葡辞書において他に類を見ない、特筆すべき用例なのであろう。

一旦世に送り出された論文は、そのときから独り歩きを始めるわ

けであるが、著者はその歩みを見守っておられ、補注や参考文献としてその後の研究の進展、動向をみきわめられ、論文集に編まれたこの機会に、本著においても手当てが施されている。第一部第一論文、第二部第二論文などにおいて。ただ、本著採録論文については、参照の行先として原著の掲載誌ではなく、「本論攷所載」の旨の加筆もなされた方が有難かつたと思う(例えば一六四頁の(二〇)、二六五頁の参考)の如き)。

(二)

目録を参照すると、資料編が本著全体の六割強を占めることから窺われるように、著者は本著に於て室町時代語の国語資料的価値を手堅く吟味しておられる。キリシタン資料、朝鮮資料などを自在に駆使して立論され、しかも資料の扱いが決して恣意にはしらず、厳正な資料的考証から始められる。例えばそれは①資料の作成者に求められ、また②資料相互の関連性に於て追求される。①について一例をあげれば、捷解新語の著者康遇聖を掘りおこし、その伝記を調査、彼の日本語体験ならびに習得した日本語の背景を考究し、捷解新語の内容との関連性を考察される。その副産物として例えば、第十卷「国尽し」における易林本節用集との符合を指摘される。また、島名記載に於て独特の立場をとる易林本と、和漢通用集が一類をなし、近縁関係にあるという事実も、この流れに於て解き明かされた。②についても例示するならば、その康遇聖は文祿の役に十二歳で虜囚となつて十年間の日本生活を送り、帰国後も、朝鮮使節に随行して三度来日した。キリシタンの記述した日本語が規範意識に支えられた「古い」言語であるのに対し、康遇聖は文祿慶長当時の

「現代語」を記録(安田章「朝鮮資料の位置」国語国文第五〇—二二)しているわけで、捷解新語という一資料がキリシタン資料と対応されるとき、著者によって奥行きのある言語資料として生きてくるのである。

著者のこうした資料の扱いはキリシタン文献についても同様で、外国人宣教師たち、就中マノエル・パレトの日本語修得の過程の究明にも現われている。パレトは、来日まもない頃に「サントスの御作業」やエワンゼリヨの筆録をしたことで著名であるが、他に「天草版平家物語」に書き入れをした筆写者に推定されている人物でもある。著者によるその克明な研究は前掲『天草版平家物語難語句解の研究』に於て結晶したが、本書に収録されたロドリゲス小文典の翻訳も、もっぱら、この外国人宣教師の日本語学習法の説明という問題設定の延長線上に位置づけられる。(余談ながら、キリシタン時代の日本語修得法は、昨今、林立の傾向にある日本語学科における日本語教授法に有益な立言が多く、例えば、語学熟達のための条件として掲げた、教師・教科書・学習法とその次第、の三点に付した細かい注意書は、現代日本にこそ活かしてみたい、すぐれて行き届いた学習指導書といえよう)。

外国資料は、両刃の剣の如きで、扱いには謙虚な慎重さと、よほどの熟練を要する。著者は言われる。

外国資料の取扱いには、国内側資料に対するのは違った配慮が必要であり、それだけ慎重さが要求される。外国人の手に成るものであるが故に誤ったと見られるものも含まれているが、その類の誤謬だと思っていると、実は誤りどころか却つてその

方が当時の言語事実を写しとどめたものであつて、今まで知られなかつた新しい事実を知る手がかりになることすらないでは

ない。従つて、国内側資料による検証という手続きが正しいな
こととなるわけである。(二七〇頁)

著者のこのように堅実なその研究方法から、幾多の知見が導き出された。

落葉集本編の熟字配列がアルファベット順になされているとの画期的な発見も今は定説としてゆるぎないものとなつているが、これは昭和二八年に発表された第一部第八論文に於てであつた。この配列原理にてらしてみると配列の乱れと思われる例に、著者は、任意配列の可能性も認められながら、やはりそこに全体を貫く合理の精神によつて、時に意味配列、あるいは国内における先行辞書の痕跡、また成長過程における書き込みの想定、あるいは又覺語配列などの原理が混入していることを発見され、それが単なる混乱でないことを論断しておられる。(なお、一九五頁八行目の、「を」部以前に高くxそれ以後に低いことからして」の「前」は「後」の、「後」は「前」の誤りであろう。序でながら、一九七頁の「明」の傍線は「教」に施されるべき誤植である)。

(三)

外国資料の自在な駆使は、変化の著しかった音韻変遷史の編述に於て、特に遺憾なく発揮されているといえよう。著者にはその師土井忠生博士と共著の『新訂国語史要説』(修文館)があるが、この書の、特に中世から近世の音韻史の記述の精度と裏付け資料の用例の豊富さは定評のあるところである。

本著に於ても、サ行音、タ行音の音価推定をはじめ、とりわけ拗音、長音に於けるキリシタン資料による裏付け用例が多く提示され

ている。

第二部第二論文に於て、著者は、H字を用いたHá, Hatなどの間投詞の音価につき、これを音価的には無音で、かつ表記的には「飾り」のようなものとして添えたと断ずる論文を取り上げられ、力をこめてやや教育的な筆致で論破しておられる。H音に関する著者の見解は妥当であると思う。

(四)

近世初期の日本語辞書に範をとり、キリシタン宣教師は、相互補完の關係に於て落葉集と日葡辞書を編んだのであるが、著者の本領はこの日葡辞書研究に於て他の追隨を許さず、その研究成果は『邦訳日葡辞書』に結実している。この『邦訳日葡辞書』には、日葡辞書を一語一語精読した者にしてはじめて可能な、細かい配慮が行き届いている。『邦訳日葡辞書』作成の過程でのご研究によるものだろうか、日葡辞書の記号の解説、中でも l (または、i (即ち、ou (あるいは) の意味する範圍の推定、日葡辞書の誤植、日葡辞書自体の記述の誤り、日葡辞書に置かれたポルトガル語の意味範圍の限定 (例えば Porto を豚と訳すか猪と訳すかなど)、および日葡辞書における日本語の意味の確定、また、日仏辞書の指摘等々は、非常に価値高い記述である。これは「駈け出しには望むべくもない」(土井博士序文) であつて、きわめて説得的である。とりわけ中世ポルトガル語の誤植の識別に至つてはこの著者ならではの眼識と学殖に敬服するばかりである。著者は慎重に、しかし確実な手さばきで実在の語、誤解されている語と、その一々を解説しておられる。「シマ(傘の轆轤)」「カラダ(死体)」「カケ(手付金)」等々の説明は著者の謎解き作

業に立ち合つて、胸のすく思いがする。

ただこうした例は、辞書の翻訳では、ときに一語か、せいぜい数行でおさまつてしまふわけで、論文の形にならない小さな御発見も多かつたと思う。そういうものを補注の中でも、せめては項目だけでも紹介していただきたかつた。

語詞では、「さもし」が「様悪し」、「もなる」が「ものある」に由来するという二論文は、いずれも考証が行き届いていて読みごたえがある。

また補注では、著者の誠実なお人柄が反映して、さらに御研究の進展のあとが「きわやか」である。(例えば第一部第四論文の趙承福氏の研究による補注など。これは昭和四八年に補訂されている)

ところで、瑕瑾に属することであるが、本文に、

従来の辞書にはあげてないけれども、「省く」に「割り当てる、分配する」意味も存したことを認めなければなるまい。(二三三頁)

とあり、補注には「はぶく」の用例を追加しておられるが、「従来の辞書にはあげてない」というお言葉(昭三七現在) についての手当てはなされていない。その後新潮国語辞典(昭四〇年)、広辞苑第二版(昭四四年)、岩波古語辞典(昭四九年)、日本国語大辞典(昭五〇年) などには、この意味をのせている。

これまた瑕瑾であるが、一八頁九行目の「大齋」のルビ「おおとさ」は「だいたい」とあるべきであり、二〇頁のラモン(？)一六一(一)の? になつてゐる生年は一五五〇年と判明している。また、三〇八頁一行目の「光信」は「高信」の誤記である。

著者森田武博士は、その師土井博士の学風を強く受けられ、土井

博士の立言を埋められながら、なかならず、語彙面で多大な業績をあげられた。本著ではかくく触れておられる各種和らげと、日葡辞書との関係についてもぜひ御説を拝読したい。ごく最近「甲陽軍鑑」が日葡辞書より少しく先行する資料との見解が出され（酒井憲二「中国語資料としての甲陽軍鑑」『文学』昭六一・一〇）、日葡辞書の語彙がさらに国内資料で厚く裏打ちされていく途も開かれてきた昨今、土井博士も推奨される森田博士統刊の「主要論文」を期して俟つ者である。

（昭和六十年五月三十日発行 三省堂刊 A5判 四二六頁 一〇〇〇〇円）

—— 獨協大学教授 ——

（昭和六十一年十一月十四日 受理）